

平成26年度 国際教育推進委員会活動報告

著者	建元 喜寿, 石井 克佳, 加藤 衛弘, 小林 美智子, 松井 一夫, 高良 正輝, 加藤 敦子, 今野 良祐, 熊谷 優一, 仲本 佳子, 都志見 聖子
著者別名	Tatemoto Yoshikazu, Ishii Katsuyoshi , KATO Morihiro, Kobayashi Michiko , Matsui Kazuo, Takara Masaki , Kato Atsuko , Konno Ryosuke , Kumagai Yuichi , Nakamoto Yoshiko, Tsushimi Seiko
雑誌名	研究紀要
ページ	71-76
発行年	2015-09
その他のタイトル	An Annual Report of the Committee of International Studies 2014
URL	http://hdl.handle.net/2241/00144533

平成26年度 国際教育推進委員会活動報告

国際教育推進委員会

建元喜寿・石井克佳・加藤衛拓・小林美智子・

松井一夫・高良正輝・加藤敦子・今野良祐・

熊谷優一・仲本佳子・都志見聖子

7年前に国際教育推進委員会を発足してから、各方面で声高に叫ばれている「グローバル人材の育成」を目指し、筑波大学附属坂戸高等学校では総合学科の特長を生かしながらさまざまな国際教育・ESDの取り組みを行ってきた。2014年度には全国で56校、総合学科では唯一のスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定された。また、本年度はユネスコアジア文化センターが実施した「RICEプロジェクト」の日本代表校にも選出された。本稿では国際的視野に立った卒業研究支援プログラム、高校生ESD国際シンポジウムの活動、RICEプロジェクトを中心に平成26年度の活動をまとめた。

キーワード スーパーグローバルハイスクール 国際教育 ESD(持続発展教育) 校外学習
教科「国際」 ユネスコスクール 課題研究

1. はじめに

筑波大学附属坂戸高等学校(以下「本校」)では平成20年に校内の国際教育推進委員会(Committee of International Studies、以下「CIS」)を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」をはじめ、インドネシア・タイ・台湾などにある学校との交流、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際ESDシンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成26年から5年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校の指定を受けることになった。

研究開発課題名は「先進的な総合学科を活かした持続可能なアセアン社会を創るグローバル人材の育成」である。総合学科のカリキュラムを活かし、すべての科目が「課題研究」に結びつき、生徒がグローバルな課題の解決にむけられるような教育課程の開発を行っている。とくに語学だけではなく、「グローバル社会において、自分は社会と将来どのようにかわり、平和で持続可能な社会を実現するために、自分は何ができるか。」を生徒自身が考え、実践できることを重視している。

総合学科高校のパイオニアとして、グローバル社会におけるキャリア教育を充実させながら、さらなる実践を積み重ねているところである。

2. 平成26年度の本校における具体的な活動内容

2.1. 国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム

平成20年度より実施しているこのプログラムは、3年次の学校指定必修科目「卒業研究」で国際的なテーマを扱う研究を行う(または行おうとしている)生徒に対し渡航費の援助を行うものである。20年度から25年度までの6年間で計34名の生徒がこのプログラムに応募し、うち11名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきた。

26年度においては2年次生を対象に募集した結果、9名の生徒が応募した。なお、それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった。



SGH国際フィールドワークの様子
—JICA・ヤマハ楽器CSR事業サイト—

表1 平成26年度「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」応募生徒の研究テーマ一覧

生徒	希望渡航国	研究テーマ
A	オーストラリア	オーストラリアと日本の幼稚園の違い ～オーストラリアの1日5食制度について～
B	イタリア	「オリンピック教育」 ～自転車競技の視点から～
C	ドイツ	日本とドイツのチーム医療の現状を踏まえ、東京オリンピックを視野に入れたチーム医療のあるべき姿
D	ドイツ	ヨーロッパと日本の街並みの違い
E	ドイツ	日本におけるカーシェアリングの可能性～環境に優しい車社会を目指して～
F	ドイツ	シュタイナー教育の元祖であるドイツに行き現地の幼稚園教育を観察する
G	アメリカ	日本と海外の他言語教育とマナー ～なぜ日本人は寿司を Sush <i>i</i> と発音するのか～
H	タイ	仏教国タイから学ぶ学校での多文化共生
I	インドネシア	日本の英語教育と世界の英語教育

CISにおいて「海外への渡航により卒業研究の深化が十分期待できるか」「費用に問題はな



ドイツの病院でインタビューを行う生徒C



チュラロンコン大学附属学校での調査を行う生徒H

2.2. 高校生国際ESDシンポジウム@坂戸2014

ESDとはEducation for Sustainable Development(持続発展可能な社会づくりのための教育)のことである。これまで本校と交流実績を持つ海外校との交流を深めて生徒の国際的な視野を広げるとともに、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的として、2012年から実施している。第3回目となった今年、ユネスコのRice Project日本代表校の指定を受けていたため、はじめて共通のテーマとして「アジアの食と環境(Asian Diet and Environment)」を設定し、2014年11月12日(水)に筑波大学東京キャンパス3ヶ国5校の生徒・教員を招待し開催した(インドネシア環境林業省附属高等学校、インドネシア・ボゴール農科大学附属コルニタ高校、フィリピン大学附属高等学校、タイ・カセサート大学附属高等学校)。ユネスコのRice Projectの同じく日本代表校であった神奈川県立有馬高等学校も参加して、日本国内での交流も広がった。

このシンポジウムでは各校の生徒によるプレゼンテーションやディスカッションとともに、本校生徒による日本文化紹介、海外生徒による各国の文化紹介も行い、生徒同士の相互交流を深めることができた。また海外から

の参加者（教員・生徒とも）は本校生徒の家庭に4泊5日のホームステイをし、校外でも異文化理解を深めた。

さらに今年度は11月13日(木)に筑波大学農学ESDシンポジウム(Ag-ESD)へも参加し、参加校の活動紹介と本校の国際教育のとりくみ、Rice Projectのとりくみ等を発表。大学生、大学院生に交じりポスターセッションにも参加した。

「アジアの食と環境」というテーマは、持続可能な発展のために何が必要か、高校生として考えるために設定された。持続可能な発展(Sustainable Development)とは、言い換えれば地域社会の発展と自然環境保護の両立を実現することである。そして、私たちの日常生活、衣食住のありかたが環境に与える影響を無視することはできない。今大会では生活に欠かせない要素のひとつである「食」をとり上げ、コメを中心とした洗練された食文化を古代から築いてきたアジアの国々に生活する高校生が、食と環境のつながりの中に課題を発見し解決することを目的とした。シンポジウム期間中、参加する高校生には、地域の伝統的な食生活と環境との共生、そして地域の発展の両立を議論することを求めた。

今回のシンポジウムでは、これまでの大会での経験をもとに、生徒による大会運営に挑戦した。受付や会場設営、照明や視聴覚機材の操作はもちろん、全体司会やシンポジウムのファシリテーターもすべて生徒で行った。運営した生徒は、今年度組織したS-CIS(生徒国際教育委員会: Student Committee of International Studies)のメンバーで本校の1~3年次生で国際教育活動に興味のある生徒が主体的に参加している。大会後も筑波大学留学生との交流や模擬国連活動等、様々な活動に関わる等活発に活動している。ちなみにS-CISという名称は、教職員の国際教育委員会:CIS(Committee of International Studies)に付随する団体として位置することに由来し、これまで教職員が生徒のために先回りして行ってきた様々な運営を生徒自身が担うことで、先生主導ではない高校生主体の国際交流の実現を目指している。この生徒団体の活発な活動で、まさに高校生による高校生の国際シンポジウムを実現できたと考える。



第3回高校生国際ESDシンポジウム2014@茗荷谷



Riceプロジェクト昼食会



筑波大学におけるポスターセッション

2.3. 学校設定教科「国際」の実践

本校では平成23年度入学生の教育課程より、学校設定教科「国際科」を設置し、本校の国際教育の核を担うべく下記の4科目を設けている。24年度に2年次科目の2つがスタートし、続いて25年度には3年次科目も合わせ4科目すべての実践が始まった。各科目における実践

の様子は、本校が毎年発行している研究紀要に順次掲載していく（「国際社会」については同第50集（2013）に掲載済み）。SGH科目として、平成27年度入学生から2学年で全員必修の国際科科目を開発する計画である（仮称：TGAP）。これについては次年度報告する。

・「国際社会」（2年次選択）：英文記事の読解を通して世界の諸相に触れるとともに、日本・外国文化や国際的課題についての調査および英語でのプレゼンテーション活動を行い、国際的な課題に対して考察・行動するための基礎を養う。

・「Discussion & Debate」（2年次選択）：日本語および英語によるディベート・ディスカッション活動を通じて、多文化共生社会の中で諸課題に対して主体的に考え行動するために必要な議論・討論のスキルを身につける。

・「Global Studies」（3年次選択）：現代の世界に生じているさまざまな問題について、ゲーム・議論・作業・レポートや小論文の作成（コンクールへの応募を含む）・校外での活動・海外生徒との交流活動など具体的な活動を通して多角的・多面的に考察する。

・「比較文化論」（3年次選択）：日本の文化と諸外国の文化のいくつかを取り上げ、「衣・食・住」「聖と俗」などをキーワードに多角的・歴史的・思想的に比較することを通して、「芸術とは何か」「文化とは何か」「現代文明とは何か」などについて考察し、柔軟な思考力・表現力・発表力を身につける。

2.4. その他の国際教育活動、実施内容の考察、および来年度にむけた提案

1) 3か国分散型海外校外学習の実施

2年次生対象の海外への校外学習の渡航先を、従来の160名全員が1か所に行くという形から、25年度には3ヶ所に分かれて行くという形に改編して実施した。グループの規模を小さくして生徒一人一人の活動への関わりを深めながら、海外の交流校との交流を継続的なものとし、かつ本校生徒と現地校生徒との協働学習活動を実現することがねらいである。本年度はその2か年目となる。その評価と考察については、筑波大学教育局春季研修会で報告する。

2) ユネスコスクールとしての活動

2005年から日本の提案によって始まった「ESDの10年」は2014年に最終年を迎えた。本校は、本年度ESD学校大賞を受賞できた。今後の、ESDの世界の動向が未知数で

はあるが、GAP (Global Action Plan) を取り入れた学習活動をSGH科目で取り入れるなどしていきたい。

3) 留学生の受け入れ

2014年9月～2015年8月にベルギーから1名、2014年12月～2015年1月にオーストラリアから1名の留学生を受け入れた。短期ではあるが、昨年同様、2014年10月～11月にはコルニタ高校から8名の生徒が約1か月間滞在した。また、本年度の研究大会でははじめて海外から高校生を招へいし本校の生徒と共同で発表を行った。外国からの生徒が日常の学校生活を本校生徒とともに過ごすことにより、本校生徒の異文化受容力を高めることができるという期待のもと、今後も積極的に外国からの留学生を受け入れていきたいと考えている。

4) 本校生徒の留学の推進

8月に、ニュージーランド、インドネシア、ベルギーにそれぞれ1名、1年間の予定で渡航した。また、2015年4月からアメリカへ1名、8月からインドネシアに2名が留学を計画している。また、卒業生が大学の奨学金を得て、海外の大学に1年間留学をすると報告にきた。本校の国際教育の成果が浸透してきているといえる。

5) 教員の国際的活動

本年度は3か国校外学習、卒業研究引率、国際フィールドワークなどSGH活動で、インドネシア5名を筆頭に、カナダ4名、オーストラリア4名、台湾3名、ラオス2名、タイ1名、ドイツ1名渡航するなど、教員も積極的に国際教育・ESDの実践のための活動を行っている。学校の国際化をすすめるためには教員の国際化がカギを握っている。今後とも、より多くの教員が関わる体制を構築していきたい。

5) 国際教育活動の効果の検証と外部への発信

附属学校教育局プロジェクト研究4「子供の国際的資質を育てる実践」（座長：甲斐雄一郎教授）において、本校で実施している海外校外学習の効果を質問紙調査（実施前と実施後に同様の調査を行うことで生徒の変容を測る）により検証する作業を進めている。今後はSGH活動も含め、さまざまな国際教育活動が生徒たちにどのような変容をもたらしているのか検証を進めていきたい。

また、本校は本年度ESD大賞を受賞したように、外部からの評価も高まっている。日々の活動をできることから発信していきたい（なお、本校のESDの活動等につ

いて、月刊高校教育に「身近なところから始められるESD」（建元（2014））にまとめて報告した。

6) 国際教育関連の分掌・委員会等の整理

本校は、現在平成29年度開講を目指して国際バカロレア（IB）校に認定されるべく準備を進めている。SGH事業とあわせて本校の新しい形を作っていくことになる。しかし、様々な業務が交錯し合いながら進んでいった今年度、どの仕事をどの分掌や委員会が担当するのか、分掌が難しい場面もあった。SGHの本格実施もはじまる27年度は、様々な業務の整理が必要であると感じている。来年度の紀要で整理後の姿を提示したい。

※なお、SGHの平成26年度の内容は、第1年次報告として別途まとめている。SGHの詳細については、そちらを参照ねがう。

引用文献：

建元喜寿（2014）「身近なところから始められるESD」、月刊高校教育9月号。

【資料1】平成26年度 国際教育・ESD 活動一覧

4月	文部科学省スーパー・グローバル・ハイスクール指定
7月	2年生1名がNZへ、3年生2名が姉妹校コルニタ高校・ベルギーに1年留学へ
8月	国際フィールドワーク（インドネシア）、国際フィールドワーク入門（黒姫）実施
8月	月刊高校教育に本校のESDの取組みの記事が掲載
8月	広島県高等学校教育研究会総合的な学習の時間部会にてESD講演
8月	ユネスコスクール研修会@岡山にて実践発表、分科会講師
9月	ESD Rice Project ワークショップ in マラン（ACCU 主催）に教員参加
9月	ESD Japan レポート（文部科学省発行）に本校の実践事例が掲載
9月	2年次総合「インドネシア班」インドネシア・ショップ黎明祭出店
11月	ユネスコスクール全国大会にて教員分科会発表、ポスター発表
11月	第5回ESD大賞高等学校賞 受賞
11月	姉妹校コルニタ高校から8名の留学生在が来校（4週間）
11月	本校の取組みがESD実践事例集掲載！（日本・世界のESD関係者に配布）
11月	高校生国際ESDシンポジウム@坂戸2014（第3回）開催（坂戸+茗荷谷+つくば）
12月	2年次海外校外学習 分散実施（オーストラリア、台湾、インドネシア）
1月	「初等教育資料」に本校のユネスコスクールの記事が掲載
2月	「革新的教育P」で生徒・教員がタイ渡航
2月	「国際的な視野に立った卒業研究支援P」生徒・教員がドイツ渡航
2月	第1回SGH研究大会開催
2月	コルニタ高校3名、林業省附属高校3名来日。研究大会で本校の生徒と共同発表
2月	教員2名がSGH課題研究視察でバンクーバーに渡航
2月	JICA エッセイコンテスト学校賞受賞
3月	SGHバンクーバー課題研究で教員2名生徒5名がカナダに渡航
3月	SGH国際フィールドワーク「インドネシア・ポゴールリーダー会議」 教員2名、生徒2名渡航、インドネシア政府およびユネスコ国内委員会で協議
3月	アセアン課題研究で教員2名、生徒2名がラオスに渡航
3月	筑波大学大学院生（インドネシア人留学生）によるインドネシア語講座開講
3月	福島県のBritish HillsにてEnglish Camp実施（1・2年次生希望者）